Japanese Association for Tibetan Studies

『一切悪趣清浄儀軌』における荼毘護摩儀礼について
——Buddhaguhya の註釈を中心に——

中島　小乃美

はじめに

『悪趣清浄儀軌』(D.No.483, P.No.116) は Buddhaguhya (以下 BG と略記) の註釈が存在することから 8 世紀には成立していたと考えられる。チベットにはすでに前伝期に伝わっており、羽田野 (1987, 37–38) はこの経軌を「チベット人の志向に適合した」と指摘しているし、また実際のマンダラの作例の多さからも早くからチベットにおいて関心が高かったであろうことを窺い知ることができる。

この経軌説示の目的は、その経軌名が示すごとく悪趣を清浄にすることにあり、そのためマンダラの制作や護摩に重きが置かれている。就中、護摩は古代ヴェーダ祭式に由来し、密教に取り入れられた(1)。この『悪趣清浄儀軌』では息災・増益・敬愛・降伏の四種護摩と、他経には見られない荼毘護摩を説く(2)。主に、第一章の普明ヴィルシャナを中心とするマンダラ(3)、灌頂、護摩の流れのなかで、未成就者の儀軌として荼毘護摩が説かれている。また第二章の釈迦牟尼を中心とする九仏頂マンダラ(4)儀軌、摧壊死魔無量寿マンダラ儀軌の中でも触れられているが、何れも偈頌で説かれており、ここから具体的な儀軌次第とその意味を理解するのは難しい。そのためか、大部な註釈が 5 つあるにもかかわらず、マンダラ、護摩などに関する単独の儀軌次第がデルゲ版に 11、北京版に 8 つあり、その中には荼毘儀軌が 3 つある (D.No.2632, 2633, 2637)。またプトン (Bu ston Rin chen grub, 1290–1364) にもこの経軌に基づく『荼毘儀軌』があり、ツォンカパ (Tsong kha pa Blo bzang grags pa'i dpal, 1357–1419) も『割註』の中で、荼毘に関する註釈を示している。荼毘儀軌作法次第に関する先行研究としては、川崎 (2003) があり(5)、種村 (2004, 27) もこの経軌に触れている(6)。

このように、それぞれが荼毘護摩について註釈しているが、その中でも深秘釈は BG が、実践は Ānandagarbha が詳しく、荼毘を媒介にどのように脱悪趣を捉えたのかを知る点で重要な意味をもっている。本稿は BG の『義字釈』を中心に、他の註釈との若干の比較を試みながら荼毘護摩について考察したい。

1　BG 所説の悪趣の義字釈とマンダラ及び護摩

BG は数箇処に亘って悪趣の義字釈(7)をしている。先ず上根者に対する経題の解釈の中で「悪とは因であって、実義 (bhūtārtha) に迷乱し、悪因を行ずるから悪である。趣とは〔悪因の〕果であって、何故かというならば因たる業と煩悩によって果として三界に間断な

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

く趣くからである[8]」(D.153a, P.181b) とし、また悪趣を清浄にする諸真言の功徳を解釈する箇処では「悪とは因で煩悩、趣とは果であって三界と輪廻の原因である[9]」(D.164a, P.195a) と解釈し[10]、三界に輪廻する有情として相続する中で、業と煩悩によって支配されるこの悪趣を清浄にするためにマンダラと護摩が説示される。

マンダラと護摩について、BG は註釈の初めに経軌の略義として全体構造を述べ、続いて中根者の解釈を示す中でマンダラと護摩の関わりを述べており、まとめると表 1 のようになる。

表 1: 経軌の全体構造とマンダラと護摩の関係

<table>
<tr><td rowspan="10">タントラ</td><td rowspan="2">起源（序分）</td><td>円満起源（通序）</td><td colspan="4">1. それを説いた処、2. 誤り無い説の教主、3. 清浄な眷属、
4. 誤り無い結集者、5. それが説かれる動機（後には時とある）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">特殊起源（別序）</td><td colspan="4">教主が実例を挙げること（後には教主による緒論とある）</td></tr>
<tr><td colspan="4">眷属の緒論</td></tr>
<tr><td rowspan="7">経（正宗分）義釈</td><td rowspan="5">法性より不動の意の象徴としてマンダラを示現</td><td>出世間</td><td>1. 因の菩提心の分別門において、果たる智慧の六種行・六波羅蜜が六種のマンダラと共なる点から六因で障碍を浄めるため</td><td>1. 根本は菩提心に集まる象徴
2. 悲は悪趣の因果を破す
3. 悪趣の業と寿の障碍の相続を断つ
4. 四魔降伏
5. 四種作業門から趣の利益
6. 兇悪者の調伏</td><td>1. 大マンダラ
2. 八〔仏〕頂マンダラ
3. 断無量業寿障マンダラ
4. 摧壊死魔無量寿マンダラ
5. 四部族転輪マンダラ
6. 金剛忿怒火焔マンダラ</td></tr>
<tr><td>世間</td><td>1. 世間的欲望を満たし喜びに入らしめるため
2. 世間に一致するため</td><td>1. 世間の魔鬼を滅す
2. 八方の魔鬼を滅す
3. 曜星のたたりを滅す
4. 龍毒を滅す
5. 世天の不喜を滅す
6. 天の魔鬼を滅す</td><td>1. 四天王マンダラ
2. 十護方マンダラ
3. 八曜マンダラ
4. 八龍マンダラ
5. 八大天マンダラ
6. 八ヴァイラバマンダラ</td></tr>
<tr><td rowspan="2">趣の利益をなされる象徴として護摩を示現</td><td colspan="2">物への執着を退かしめるため</td><td>物に対する見解を破す</td><td>荼毘護摩</td></tr>
<tr><td colspan="2">1. 悲円満の故に趣の利益をなされる四種護摩
2. 五煩悩を浄める</td><td>1. 法性より不動の意の象徴
2. 趣の利益
3. 生死（輪廻）を自在に操る
4. 兇悪者の調伏</td><td>1. 息災護摩
2. 増益護摩
3. 敬愛護摩
4. 降伏護摩</td></tr>
</table>

D.152b–154a, P.180b–182b

ところで BG は、註釈の最後に改めて経軌の全体構造を示し、再度護摩とマンダラとの関わりを示しているが、経軌の初めに示したものと若干異なり、よりその目的が明確に表されている。まとめると表 2 のようになる。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

表 2：経軌の全体構造

教令	起源	円満起源	1. 教主、2. 眷属、3. 処、4. 結集者、5. 時（前説とは異なる）		
		特殊起源	教主による緒論（upodghāta）		
			眷属による緒論		
	経義釈	マンダラ 1. 無分別に依止した意	出世間（勝義と矛盾しない教令）	1. 菩提心の自性として、煩悩の心を具える悲田 2. 清浄意で変現し悪趣を浄める 3. 宿業を浄め業障の相続を断つ 4. 有情の無間縁による命終を退く 5. 有情利益の御作業 6. 兇悪難化者の調伏	1. 普明根本マンダラ 2. 八仏頂マンダラ 3. 断無量業寿障マンダラ 4. 摧壊死魔無量寿マンダラ 5. 四部族転輪マンダラ 6. 金剛忿怒火焔日輪マンダラ
		2. 世俗への種々御作業	世間（世俗諦としての教令）	1. 諸障碍魔の息滅 2. 千八十四の鬼魅の息滅 3. 不一致の曜星の息滅 4. 地主の鬼魅の息滅 5. 天の鬼魅の息滅 6. 天を喜ばない鬼魅の調伏	1. 四天王マンダラ 2. 十護方マンダラ 3. 八曜マンダラ 4. 八龍マンダラ 5. 八ヴァイラバマンダラ 6. 八大天マンダラ
		護摩	屍骸護摩	煩悩の存在が〔蘊の〕水先案内（karṇa）となることを遠離するために	
			四種護摩	1. 法性より不動の意 2. 欲望円満成就 3. 三界を自由に操る 4. 兇悪者の調伏	1. 息災護摩 2. 増益護摩 3. 敬愛護摩 4. 降伏護摩

(D.229b–230b, P.271a–272a)

このような関わりの中で、煩悩の所依たる身体を焼くこと（荼毘護摩）がどのように脱悪趣と結びつくのか、以下 BG の解釈に沿って見ていきたい。

2　未成就者の脱悪趣

この経軌で荼毘護摩が詳しく説かれる箇処は、第一章の初めに天子無垢光という名の天が無間地獄を見、そこから脱する方法を世尊に問い、普明ヴィルシャナを中心とする内マンダラが説かれる。その後、帝釈天が世尊に一切有情の救護を請い、実際の作画を意図して外マンダラが詳細に説かれる。そして阿闍梨と弟子に対して灌頂の儀軌を説き、その後さらに帝釈天が未成就者に対しての儀軌を請い、脱悪趣を目的とした死者のための儀軌が説かれていく。以下経軌の流れに沿って荼毘儀軌を見ていく（該当箇所を各項目の横に示した）。

(1) 未成就者を遮止する方法 (D.182a–183a, P.215a–216b)

まず、BG は荼毘儀軌の全体像を解釈し、まとめると表 3 のようになる。

表 3: 未成就者の脱悪趣儀軌

経軌に説く順序	BG の解釈	経軌に説く功徳
1. 瓶灌頂	瓶を本尊の数だけ用意し, 瓶の中の BHRUṂ（D.BRUṂ, P.BHUṂ、P. を採る）からマンダラ宮殿中の法の自性を観想。内なる妙薬で智慧の巧方便たる悲の光明を出生すると思念。	地獄の苦しみから速やかに解脱し、彼の自性は清浄となり、諸尊の部族に生まれ常に法談を聴くものとなる。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

2. 影像、名前を書き灌頂	屍骸の影像を布か紙に書く、護摩木にクンクマで名前を書く。真言と印で灌頂、加持する。	三悪の苦から有情達を脱せしめるために真言賢者は利他行に勤めつつ、悲をもって灌頂する。
3. 本尊の姿を観想し、屍骸を塔の中に置く	塔とはマンダラのこと。御語たる種字で煩悩が生じた所を破砕するために観想して照射する。 頭頂・・・・普明ヴィルシャナ 口・・・・・釈迦牟尼 胸・・・・・一切悪趣清浄王 後頭部・・・一切尊勝 足底・・・・開敷華王 御身のツァクリーで煩悩の所依を破砕、御意の標幟（真言念誦）で煩悩の因たる心を浄めるために観想して照射する。	決定的に地獄より脱し、餓鬼と畜生の苦から脱し、天の位に出生する。
4. 護摩	煩悩の相を焼くためと一切を息滅するために降三世の三摩地に入り、胡麻、白芥子、米、黒砂糖、蜂蜜、青黒色の山羊の乳、クンクマを混ぜて 12 指の護摩木に塗り、両端に蜂蜜を塗り、者の名前を混ぜて焼供すれば、その死者は悪趣より脱する兆しが見える。	
5. 炎の形による脱悪趣の兆し（経軌 D.65b–66a, P.60a–b）	1. 白色の火舌、2. 右に燃焼、3. 上に燃焼、4. 無垢、5. 丸に舒遍しない。 →悪趣より脱した兆し。	彼は地獄から脱し、罪悪を破して、楽に趣くものに生まれたと知るべし。

この表中の 1〜2 へは 1 の未成就者が 2 へ、さらに 3 へというように、灌頂などで解脱できなかった場合の行として護摩が設定されており、BG はここまでで未成就者の略義が終わったとして結んでいる。行体系は前行、根本行、後行が一般的な行体系ではあるが(11)、ここでの略義はその前行に相当するわけではなく、「屍骸の影像を布か紙に書く」とあることから観想上の荼毘儀軌、あるいは作法手順の略義であると考えられる。このあと、BG は「屍骸を焼く Homa が示されて」として、実際の荼毘を想定した護摩が詳細に解釈される。

(2) 屍骸を焼くとは (D.183a, P.216b)

続いて BG は屍骸の義字釈を示し、

> 屍骸(12)とは因と果の状態で、因は無明で、実義（bhūtārtha）に迷謬する忽然の妄想分別が、阿頼耶の障碍の因である。それは何故かといえば、内の取蘊であるこれを取得するから、「アーダナ識は甚深微細」(13)と申されている。何故なら屍骸は智を離れている如く、因と果に迷謬するからである。外（器、身体）たる屍骸は果の本質であって、五根の及ぶ範囲において業と煩悩によって生起したものが蘊の水先案内人として現れるからである(14)。

と解釈している。次に護摩（homa, sbyin sreg）については、

> sbyin（dāna）は悲であり与楽、sreg（dahana）焼くとは四種作業で焼供するからである。屍骸の因は内心で、対治は聖なる金剛の如き智慧の三摩地で焼き尽くすことで、果である屍骸は世間の火で焼くことである(15)。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

と解釈し、前説のように護摩を悲の方便の顕現と捉えている。

(3) 護摩具と度量の深秘釈 (D.183b–184a, P.217a)

続いて BG は護摩具と炉のサイズについて解釈をする。主なものを挙げると以下の表になる。

表 4: 護摩具の深秘釈

護摩具	深秘釈
護摩炉	正しい智慧の世間の火、法界の標幟
木	方便悲
供物	三摩地から変現し、他人を愛する象徴

表 5: 護摩炉の深秘釈

サイズ	深秘釈
四肘	四智で生・老・病・死の苦を浄めたから四角
量	基準は四肘で、外の量（サイズ）は十二肘で、十二縁起の輪廻の形態より（D.gugs las, P.lus las）退く意味
穴を掘る	八解脱の智慧の口が広く開いている意味、四種作業の点から、趣の利益

このように深秘釈し、護摩炉の各々の位置に十六薩埵、賢劫の十六尊、八供養女、諸供養と、Trirāga と Pañcarāga、曜星と遊星、十護法尊、八吉祥、僧坊の守護神、四天王を描き、それら（天部）を描く目的は、「1. 世尊の教令の守護、2. 自らの眷属の悪性の息滅、3. 世俗の明晰な認識を示す」と解釈している。このように炉にマンダラの各尊が並ぶと観念し、単なる穴ではなく本尊と結びつくマンダラと捉えられている。

また護摩炉に描かれる荘厳具は表 6 のようにまとめられる。

表 6: 荘厳具

護摩炉の荘厳具	象徴
16 の雄鳥	輪廻の弟子を利益する
〔五〕瓶	法界智
トルマ	方便・般若双運
飲食物	三界を満足させる
華	菩提支分
鬘	間断なく流れる悲
宝蓋	師になる
勝幢	降煩悩魔
絹幡	種々の三摩地を具える
傘	煩悩の熱を清涼にする

これらのものを「三摩地を知ることに努力する瑜伽と、本誓物（法具）を具えるべきで、真言と印で加持して」とし、「智慧の光明を観念して焼供物と供養物などをすべて聖なるものとして喜び、悉地を得た象徴として穴の中央に置くべし〔と、説かれている〕」と解釈している。

(4) 屍骸を加持し捺印する (D.184a–b, P.218a–b)

続いて屍骸を加持し捺印し、洗浄、香の塗布、念誦、諸飾りで厳飾することについて解釈され、まとめると表 7 のようになる。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

表 7：加持、捺印

所作	深秘釈
真言	1. 五部の御身生起の真言、2. 五心真言、3. 親近の五心真言…計 15 4. 空を観想すること、5. 金剛観想…計 17
捺印	1. 外の捺印は身体、2. 内の捺印は字母の捺印、それら変化した屍骸を溶解して無と観想する
水	瓶の中の芳水
最高	17 の心真言で菩提心は〔清浄な〕月輪となったと観想
沐浴	1. 外の沐浴は瓶水で洗浄、2. 内の沐浴は広・斂観の三摩地で沐浴
念誦	1. 三摩地の念誦、2. 字母を広・斂観させて念誦。
香	クンクマなど
塗布	戒なる香を塗ること
衣	1. 真言賢者の法衣、2. 屍骸の衣
飾り	頂髻飾りなどを着ける。多くの美しいもので飾る

(5) 屍骸に真言を書いて按上する (D.184b–187a, P.218b–221a)

続いて真言を描いて按上すべし ということについて、表 7 で示した 17 の心真言を「屍骸を真言で加持して按上する意味」であるとして解釈する。まとめると表 8 のようになる。

表 8: 身体各所の真言按上の解釈

身体部位	深秘釈	真言
頭	過去の習気で生起した自性であり心の所依の故に。一切の自性は頭。**無明**は煩悩の自性、無智なる根で、頭は真如と真実際と因と果に迷乱するから。	宝華（開敷華王）の親近の心真言 oṃ sarvavid hūṃ phaṭ
臂	業の**行**などをなす因、諸外境に貪などの煩悩を起作（abhisaṃskāra）の故に行。	釈迦牟尼の親近の心真言 oṃ sarvavid aḥ
胸	特殊なものとしても智慧の自性が存在するところ。**識**は行の縁に依て各々の変化を普く知って無雑と断じないことと、我がものと執るため。	ヴィルシャナの心真言 oṃ śodhani śodhani sarvapāpaṃ viśodhaniśuddhe viśodhe sarva karmāvaraṇni viśuddhe svāhā
腰	蘊が生起する因となる依り所。識の自性に業の習気が着いて成熟するから、俱生する近取蘊は**名**と**色**が成立すること。	ヴィルシャナ身生起の種字 oṃ sarvavid oṃ
耳	樹皮を入れて蓋をしたものに等しく、識が生じ、出生の基となるし、因なる**名**と**色**を依り所とする識根は**六入**。	普明の親近の心真言 oṃ sarvavid sarvāvaraṇa viśodhaya hana hūṃ phaṭ
鼻	銅の針金が直立するに等しい。対象に依て識が生じて対象を領受する。境と根と識の三つが和合して領受して遭遇することは**触**。	開敷華王の親近の心真言 oṃ sarvavid tratha
額	光彩が出生する自性の根基。触で境と遭遇する時、受生することによって楽と愛を享楽することは**受**。	開敷華王の心真言 oṃ sarvavid tratha
口	食物等を渇愛する自性の因。受を以て境の楽と愛を享受して五蘊に執着するから**貪愛**。	釈迦牟尼の心真言 oṃ sarvāpaya viśodhaya hūṃ phaṭ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

膝	屈伸する因は膝関節で、愛によって境の識を増長しつつ出生する縁をもって**取**得することで、境に対し、我をたて執着する意味。	悪趣清浄王の身生起の心真言 oṃ sarvavid sva
両足	薀を導いて迅速にする根基で、境を取として我と所取するから業によって母胎に牽引され有（輪廻）の根基となる種子を放出するから**有**である。	開敷華王の身生起の心真言 oṃ sarvavid a
秘処	有情の生の原因の種子が生まれる処。有に輪廻し増盛するから薀が熟して母の胎内から出て、出生することが**生**。	金剛の観想 oṃ bha
頂髻	白髪となるから老いの象徴。有情たちは業によって生起して蘊が熟してついに**老**いる。それは滅すること。	開敷華王の身生起の心真言 oṃ sarvavid tratha
喉	内外の呼吸を因とする所依で、有（生命）の維持であるから先ず**生**の縁に依て**老**いて体質が変化し様々な**病**の抵抗しがたい蘊の様々な苦しみによって壊滅することは命終（**死**）である。	開敷華王の心真言 oṃ śodhani śodhani sarvāvayana sarva svargyebhya hūṃ
踝骨	足の関節の根基であって、死ぬことに酔狂して、有情は執着をもって何かによって心が悲痛する憂い。	釈迦牟尼の身生起 oṃ sarvavid hūṃ
眼	種々の境を見る原因は眼根が水と VA の如く憂いに依て心が悲痛してしまい酔狂して種々の言葉に悲しむ。	空を加持する真言 oṃ śa
眉間の白豪	本質的な光華が生ずる処。内の識の五聚とともに種々の苦を味わって執着に依て苦しむことは**三苦**と**八苦**の原因。	悪趣清浄王の親近の心真言 oṃ sarvavid hūṃ
鼻の頂き	識を生起する因。煩悩の苦によって（D.gis を採る）苦しんで、意が不安で種々の錯覚を経験することとなる。	悪趣清浄王の心真言 （真言の記載なし）

このように身体の各部位に種字を配置し、各々の真言を按上することにより五蘊仮和合の煩悩の所依たる身体を破すことと解釈されている。

ところで、この身体各処に真言を按上するという解釈は、ĀG、プトンも共通して述べているが、身体按上の数と真言に若干の異なりがある(16)。ĀG の『儀軌釈』（D.No.2626）は 18 箇所に各尊を配置し、中でも 12 箇所に金剛界マンダラの十六大菩薩のうち、12 の金・王・愛・喜、宝・香・幢・笑、法・文殊（利）・因・語の諸菩薩が配されている。BG とは 2 箇処の心真言と身体按上が合致するのみである。また『死屍護摩儀軌』（D.No.2632）では、『儀軌釈』と異なりがある。またプトンの『荼毘儀軌』では「身語意の三習気を浄めると思念して」と、身体 18 箇処の心真言按上を説き、鼻先、両眼、秘処は一致する。両者は耳、鼻、眼、膝、腕を左右に分けて解釈している点でも一致する。三者に共通する真言は、ĀG の『儀軌釈』に見られる秘処と、BG、プトンが挙げる秘処の真言 BHA のみである。また解釈については、BG が十二縁起など仏教的解釈を当てて理解しようとしているのに対し、ĀG は金剛界の十六大菩薩のうち 12 菩薩を配しており、拙論（2003a）で指摘したように

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

『金剛頂経』寄りの解釈の一端が窺えるが、BG ほど詳細な解釈を示しておらず、ĀG とプトンは場処と真言を挙げているのみである（注 16 参照）。詳細は別稿を設けたい。

続いて BG は 17 の心真言の修習の目的を「空を修習する明智であって、界と智慧の特殊性の中に五部の仏の出生の因があるから」と解釈する。また表 8 に示される身体 17 箇処のうち、「秘処は金剛の観想であり、眼は空を加持する真言」とある。これについては「所取たる外境が無いときに、対象として見られる対治は空を修習することである。能取たる内心がないときに、我と見る対治として金剛〔の観想〕を修習する」と述べている。また 文字 については、「表現する因（動機）は菩提を描くことであり、真言は明（vidyā）[17]の特殊性として示すこと」とし、秘処と眼の 2 箇処以外の 15 箇処の心真言を三つにまとめ、心真言、親近の心真言、身生起の心真言とし、更に印としても解釈している。要約すると以下の A、B のようになる。

A

1. 特殊な五種の心真言… 通達菩提心。心真言（snying po, hṛdaya）とは**因**の意味。
2. 五親近の心真言…果たる無上菩提心を得て、布施の因となすから。親近の心真言（nye ba'i snying po, upahṛdaya）とは**縁**で、聖なる心髄の智慧の意味。
3. 五身生起の心真言…果たる本質に安立する。無上**果**に趣かせる意味。

B

1. 五種心真言〔の印〕…通達心の**因**、悪趣清浄の因である五種煩悩を摧破する印。
2. 五種親近心真言〔の印〕…**縁**であり、智慧による精進〔の姿〕であって、悪趣五道を摧破する印。
3. 五種身生起〔印〕…〔**果**であり、〕五種蘊を摧破する印。

(6) 屍骸を木の上に按上 (D.187a–b, P.221a–b)

次に屍骸を焼くため、木の上に按上する儀軌が解釈される。経軌に、悪趣を清浄にするからとあり、ここで BG は再度、悪趣清浄の義字釈を示し「悪 とは煩悩で因のこと、趣 とは果で三界に輪廻することである。浄める とは、因は金剛の如き三摩地で浄めることと、縁の対治は聖なる智慧の広・斂観で浄めることと、悪趣の果は身の種字の光明鬘によって浄めることの三つである」とする。座を伴い、そのものを中央に置いて、その〔屍骸の〕所作であると説かれることについては、「座 とは 2 種類で、1. 外部（外マンダラ）に同じようにするために木の上に八葉蓮弁を描くことと、2. 三摩地と相連させるために PAṂ から八葉蓮弁、MAṂ から日輪を修習することの同義語。中央 とは、マンダラ宮殿における所作の意味。置く とは、そのもの（屍骸）を座に置く意味」とし、その 所作 は、前説の三種類の心真言を按上することであり、すなわち「屍骸 そのもの にも五心真言を按上することは、五種の煩悩を離れさせて、五智を修習して、五種の親近の心真言を按上したことで、五道が浄まって五部族に生起することと、五身生起〔の心真言を按上〕すれば悪趣の所依たる五蘊を破して五宝の供養物に変えるか、解脱の五聚に変えたと修習すること」と解釈しており、常に五智をもって五部族に生まれさせるということが屍骸按上の所作の中にも説かれている。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

(7) 衣を真言で印持し、煽火すること (D.187b, P.221b–222a)

次いで持真言行者は真言を以て印持した衣で覆うべし ということについて、「業金剛なる持真言行者は縁と対治する聖智の光明を衣に放光し、衣を印持（＝五部の種字で、六部・五色として加持）し、屍骸を覆うこと」で、続いて 善なる火天をよく煽いで、について「火天は智慧の口で供養を食べる者（hutāśa)。この智慧の口で煩悩を食べ、空にする」と解釈し、続いて 千の火舌が纏って燃焼する身体 についてまとめると表 9 のようになる。

表 9: 煽火の深秘釈

煽火	深秘釈
火	智慧
舌	御作業
千	変現すること
纏巻	悲で趣の利益のために纏縛し和合する
熾燃	本尊〔火天〕の智慧薩埵の身として
身体	三摩耶薩埵を修習して無二として加持したもの

(8) マンダラ尊の請召 (D.187b-188a, P.222a–b)

続いて 如来方を同様に請召し について、再度 如来 の義字釈を示し、要約すると「明瞭なる法性（abhrāntadharmatā）で、智慧を以て不顛倒に通達し、勝れた智慧から五部の仏として眷属を伴って趣の利益に来たこと」とし、請召 とは、「〔仏の〕自性としてのマンダラの諸賢聖を請召して、自らの三摩地を生起することに関しては、水と乳を混合するようにして、智慧の火炉に順次に後説のように供養をすることの同義語」と解釈している。

(9) 火の観察 (D.188a–b, P.222b–223a)

次いで火天を観察すべし ということについて、火の相の解釈は表 10 のようになる。

表 10: 火相の観察

		火相	象徴
聖人		1. 丸く渦巻く	1. 法界体性智
		2. 白く照輝	2. 大円鏡智
		3. 真っ直ぐ燃焼	3. 妙観察智
		4. 閃光を発す	4. 平等性智
		5. 上に放出せず燃焼	5. 成所作智
有情	六種功徳者	1. 白色に燃焼	1. 尽習気
		2. 右に旋回して燃焼	2. 輪廻を退く
		3. 上方に旋回して燃焼	3. 忉 利天に到る
		4. 無垢に燃焼	4. 四（波羅夷）に近き罪の過失に不染
		5. 丸く閃光を発せず燃焼	5. 四（善）に近い吉祥
		6. 電光の如く無垢明瞭	6. 資財家畜の繁栄
	五種過失者	1. 褐色不明瞭燃焼	1. 習気の障碍の未浄
		2. 青光に左旋回	2. 未到忉 利天
		3. 下方に旋転し混煙	3. 四罪に近く不潔
		4. 発散し青黒	4. 資財、家畜の不産
		5. 旋転し風で北方に吹滅	5. 伝染病、疾病の当来

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

このように火や煙の様子から成就を判断することが解釈されている。

荼毘の作業の過失の口伝として、次いで勧請するために資具を三遍供養 ということについて解釈し、「炉に順次に本尊を招き、供養物を燃焼させ、各々の本尊の身・語・意を喜ばせんために三遍〔供養を〕捧げる」としている。

(10) 未成就時の利得儀軌と骨の金剛収斂 (D.188b–189a, P.223a–224a)

続いて「未成就者の利得のため」として、罪悪をなした者に対する成就法が解釈されており、表 10 の五種過失者に対する解釈と考えられる。経軌には降三世の姿をした金剛手が登場する。それについて BG は「本尊として降三世の姿をとって現れ、金剛杵（清浄智）と蓮華（煩悩に不染）と索（不捨輪廻、大悲方便）を持った三面六臂の忿怒降三世の姿」と解釈している。この本尊が「白色の八葉蓮華座に安住すると修習し、罪悪をなした屍骸そのもの、あるいは焼いて灰にした上に威圧して本尊が安住するとの三摩地によって修習する。降三世の真言を千或は万回念誦し、罪悪を持つ者の名或は屍骸を混ぜて護摩をしたら成就する」といわれている。次いで解脱するものになることと、金剛収斂の真言によって ということの解釈で方法について述べられる。「降三世の三摩地を修習し已ったら、遺骨そのものを 金剛収斂の真言“oṃ vajra tirinti ” と唱え、遺骨を収斂してこの名号で本尊として灌頂する」その儀軌は要約すると以下のようになる。

1. 自らが本尊と修習する儀軌
2. 遺骨そのものを宝の財宝として修習する儀軌
3. 真言の種字が菩提心の月輪と修習する儀軌
4. 器の BHRUṂ[18]から宝の宮殿を修習する儀軌

このように解釈し、続いて「収斂 とは、遺骨は宝の燃焼であるとして器に収斂すること、因である煩悩を対治である智慧の力で収斂することと、果である五部の〔仏の〕本質として収斂することである。このように収斂して、尊勝瓶に香水と牛乳と酪と酥油と牛の糞と尿との五つの香の物を混合し、安置して チョルテンを造って百八から十万遍まで真言と印を、三摩地と 念誦しつつ、悉地の象徴であるチョルテンの燃焼と、笑顔と香と光明と 様々な姿の顕示は善き象徴である。〔一方、〕花等の除去や悪い香などが出たら、悪い兆しで、自身が寝ずに三摩地に精神集中し、真言の種字を念誦すれば、本尊の姿になって、菩提の因として決定すること疑いなしと、普明〔ヴィルシャナ〕が仰せられた」と解釈している。

(11) 屍骸なきときの特殊儀軌と善行者の脱悪趣 (D.189b–190b, P.224a–225b)

経軌中の あるいはもし無くとも (yang na med par gyur na yang //) ということについて BG は、屍骸がないときの儀軌として解釈している。すでに亡くなった人、溺死者、屍骸がない者などに対して、修習方法は「1. 真言の種字を念誦し、名前を唱え、姓名と真言の種字を混ぜて唱え、クンクマで樹皮或は紙に名前を書き観念する。対治たる智慧の変現によって溶解したら、それらと泥を混ぜてチョルテンの鬘、或は本尊の姿をつくってもよし。2. 護

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

摩をして灌頂してもよく、〔そのようにすれば〕決定的に忉利天に生まれる。3. 灰に白芥子を混ぜ、死者の名前を申し上げ、普明ヴィルシャナの真言で印持して海か河に流しても悪趣より脱するであろう」と解釈している。

その後は善行（六波羅蜜行）を積んだ人は容易に悪趣から脱することができ、善行を積まなかった人は「菩提を考察せずに仏の教えをののしり、悪の本質を観察しないことと、父母を親愛せず、菩提心と相応しない人達は成就しないとヴィルシャナが仰せられた」とし、護摩義を釈了したとしている。

3　まとめ

以上、BG の註釈に沿って荼毘に関する一連の儀軌を追ってみた。これによれば死者を供養するということは、死を媒介として悪趣から脱し、善趣に生まれ、無上菩提を得、五部族に生まれることを目的とする。そのために身体各部位に真言の種字を按上し、五蘊仮和合の身体を焼く（護摩）ということを通して、五根本煩悩を五智に転ぜしめてゆく。阿闍梨は故人の煩悩を全て引き受け、本尊の三摩地に入り、智慧薩埵、三摩耶薩埵として五智に転換せしめ、五部族に生まれさせるという役割を担う。そのために護摩が非常に大きな役割を持っているわけである。また BG 自身の言葉を借りれば、成就法は観想・念誦・護摩の順に勝れており、護摩は下品の成就法ではあるけれど、だからこそ衆生と仏を結ぶものとしての役割を担うものであるとも考えられる。さらに今回は僅かではあったが、他の註釈者の屍骸の真言按上の解釈を通して、BG が仏教思想を根底に据え、さらに密教の秘儀を通して悪趣を清浄にすることを解釈していった特徴を知ることができ、古来ヴェーダから由来する護摩を仏教の護摩として理論を構築していった過程の一端を見、そのようなところに BG の解釈の面白さを見ることができる。

ところで、この経軌は葬送儀礼の流れの中で荼毘護摩を取り挙げている訳ではない。あくまでも悪趣を清浄にするために、死を成仏の機会と捉え、護摩という方便を用いているのである。さらに屍骸が無いときの儀軌や罪悪をなした者に対する儀軌が解釈されていることからも、その背景には非時死が想定されていると考えられ(19)、あらゆる悪趣に繋がる兆しに対応するものとして説かれたことが知られる。それはまた全ての衆生が救われない限り、自分も解脱しないという如来の誓願を吾が誓願とする金剛阿闍梨の具体的な姿を示す一つの形に他ならず、あくまでも説示の対象は瑜伽行者であり、基本は四種護摩にあり(20)、現世に成仏することが目的である。残りのマンダラ説示の目的は悪趣に堕ち入らないように、星の巡りの災いや、伝染病などの息滅のためにヒンドゥーの神々を始め、宿曜、魔鬼、龍などを眷属に取り込み、灌頂により金剛名号を授け、仏力を託し、仏法の働き手としてゆくことにある。この経軌が前伝期のチベットにいち早く伝わり、受け容れられたのは、多彩な内容を持ちながらもコンパクトにまとめられていることと、魔鬼たちの調伏と、死者に対する儀軌を説くことから関心が高かったためであろうと考えられる。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

略号

ĀG『儀軌釈』

Sarvadurgatipariśodhanatejorājatathāgatārhatsamyaksaṃbuddha-nāma-kalpa-ṭīkā.
De bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas ngan song thams cad yongs su sbyong ba'i gzi brdzid kyi rgyal po zhes bya ba'i brtag pa'i bshad pa. (D.No.2628. ju, P.No.3455. gu)

ĀG『死屍護摩儀軌』

a. *Śrī-Sarvadurgatipariśodhanapretahomavidhi.*
Dpal ngan song thams cad yongs su sbyong ba'i ro'i sbyin sreg gi cho ga. (D.No.2632. ju, P.No.3459. gu)

b. *Sarvadurgatipariśodhanamarahomavidhikarmakrama.*
Ngan song thams cad yongs su sbyong ba'i shi ba'i sbyin sreg gi cho ga'i las kyi rim pa. (D.No.2633. ju, P. 欠)

Bu ston『荼毘儀軌』

Ngan song sbyong rgyud nas gsungs pa'i ro sreg gi cho ga sdig pa zhi byed . In *The collected Works of Bu-ston.* Ed. L. Candra. part 13 (pa) . (Śata-piṭaka series Vol.53) . New Delhi, 1971.

BG『義字釈』

Durgatipariśodhanārthavārttika-nāma.
Ngan song sbyong ba'i don gyi 'bru 'grel. (D.No.2624. cu, P.No.3451. ku)

D. Tibetan Tripiṭaka, sDe dge edition.

P. Tibetan Tripiṭaka, Peking edition.

Tsong kha pa『割註』

Ngan song sbyong ba'i rgyud rje'i gsung gi mchan dang bcas pa. (タシルンポ版 tha, ラサ版 tha)

『一切悪趣清浄儀軌』

Sarvadurgatipariśodhanatejorājāsya-tathāgatasye-arhate- samyaksaṃbuddhasya-kalpa-nāma.
De bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rjogs pa'i sangs rgyas ngan song thams cad yongs su sbyong ba gzi brjod kyi rgyal po'i rtag pa.(D.No.483. ta, P.No.116. ta)

文献表

奥山直司

1984 「Abhayākaragupta の護摩修法」『印度学仏教学研究』、32–2、pp.(104)–(106)。

1999 「インド密教ホーマ儀礼」、『インド密教』立川武蔵・頼富本宏編、pp.175–193。

小野田俊蔵

1995 「チベットにおける葬送儀礼」『佛教大学総合研究所紀要』20 別冊、pp.205–212。

川崎一洋

2003 「インド密教における葬送儀礼の一考察——『悪趣清浄タントラ』に基づく荼毘護摩儀軌を中心に——」『仏教史学研究』46、pp.1–16。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

——『一切悪趣清浄儀軌』における荼毘護摩儀礼について——

北村太道

1997 「『Tantrārthāvatāra』を中心とした『金剛頂経』の研究（その 20）」『密教学』33、pp.39–55。

1998 「『Tantrārthāvatāra』を中心とした『金剛頂経』の研究（その 21）」『密教学』34、pp.65–88。

1999 「『Tantrārthāvatāra』を中心とした『金剛頂経』の研究（その 22）」『密教学』35、pp.1–26。

1999 「護摩儀礼」『チベット密教』立川武蔵・頼富本宏編、春秋社、pp.221–236。

2000 「『Tantrārthāvatāra』を中心とした『金剛頂経』の研究（その 23）」『密教学』36、pp.1–28。

田中公明

1993 『チベット密教』春秋社。

種村隆元

2004 「インド密教の葬儀——Śunyasamādhivajra 作 *Mṛtasugatiniyojana* について——」『死生学研究』2004 秋号、pp.26–47。

月輪賢隆

1965 「西蔵訳大日経并に註釈（抄訳）——漢訳第二十七世出世護摩法品より第三十一嘱累品まで対象——」『密教学』1、pp.67–116。

中島小乃美

2002 「Buddhaguhya の『一切悪趣清浄儀軌』観（1）」『密教学』38、pp.87–102。

2003a 「Ānandagarbha の『一切悪趣清浄儀軌』観」『密教学』39、pp.75–94。

2003b 「『一切悪趣清浄儀軌』の註釈研究——Kāmadhenu の註釈書にみる引用経軌について——」『密教学研究』35、pp.29–46。

羽田野伯猷

1968 「チベットの仏教受容の条件と変容の原理の一側面」『チベット・インド学集成』第 2 巻チベット編 II、法蔵館、1987、pp.3–195。

宮坂宥勝

1972 「護摩儀礼」『インド古典研究 II』成田山新勝寺、pp.207–300。

森雅秀

1993a 「護摩修法と火炉に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集 117、pp.35–52。

1993b 「インド密教における護摩儀礼の展開」『印度学仏教学研究』83、pp.(127)–(135)。

頼富本宏

1978 「無上瑜伽密教の実践儀礼」『日本仏教学会年報』43、pp.1–17。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

T.Skorupski.

1983a *The Sarvadurgtaipariśodhana Tantra: Elimination of All Evil Destinies.* Delhi: Motilal Banarsidass.

1983b "Tibetan Homa Ristes" *Agni: The Vadic Ritual of the Fire altar.* vol.2. Berkley: Asian Humanities Press. pp.403–417.

1994 "Jyotirmañjarī: Abhayākaragupta's Commentary on Homa Rites"『高野山大学密教文化研究所紀要』8、pp.236–206。

注

(1) 密教では先ず所作タントラである『蘇悉地経』(D.No.807. wa, P.No.431. tsha) において集約され、息災・増益・降伏の三種護摩が説かれている。『大日経』(D.No.494. tha, P.No.125. tha) にも三種の護摩が説かれている (外編には敬愛もあり)。『金剛頂経』(D.No.479. nya, P.No.112. nya) は第二章の降三世品に四種 (息災、増益、敬愛、降伏) のほかに、寿命、護身、鉤召、縛など 16 種の護摩が説かれている。北村 (2000) 参照。同じく瑜伽タントラである『金剛頂大秘密瑜伽タントラ』(D.No.480. nya, P.No.113. nya) には息災、増益、降伏、召請、敬愛が説かれ、五部 (如来、仏、金剛、蓮華、羯磨部) の立場から五種護摩へと変容している。

(2) 『大日経』には荼毘護摩は説かれないが、月輪 (1965, 77–8) に、「終局 (Kritānta) の火は閻魔 (Yama) 火天を」について BG の「と云うは死亡の時の護摩は閻魔火天であると云うこと」という解釈が見られる。また不空訳『不空絹索毘盧遮那佛大灌頂光真言』(大正 No.1002. pp.606–07) には「身壊命終墮諸悪道。以是真言加持土沙一百八遍。尸陀林中散亡者尸骸上。或散墓上。遇皆散之。…」とあり、光明真言力によって死後、諸罪悪から救われることが説かれている。

(3) 第一章の荼毘儀軌に関しては D.65a–67b, P.59b–62b までと思われる。今回はこの部分に対する BG の註釈を取り上げる。なお経軌の引用部分は下線で示した。

(4) 仏頂という名称は、『大日経』には、釈尊の部族に配される五仏頂、三仏頂、計八仏頂が勝れた仏部として説かれている。BG は註釈の中で八仏頂と解釈しており、多分に『大日経』を意識下に置いた解釈だと考えられる。Ānandagarbha (以下ĀG と略記) は中心の釈迦牟尼も含めて仏頂として考えており、ĀG 以降、チベットにおいても九仏頂マンダラという呼称が定着しているためこの名称を用いた。

(5) ĀG の『死屍護摩儀軌』(D.No.2632, 2633) を中心にこの経軌に説かれる荼毘護摩の周辺に触れ、次第の和訳もなされている。

(6) Śūnyasamādhivajra 作の *Mṛtasugatiniyojana* についての考察の中で「『秘密集会タントラ』の体系に基づき、足りないところは『悪趣清浄タントラ』から補足した」と説かれていることが指摘されている。インド密教の立場からもこの儀軌が荼毘に関して重要な位置を占めていたことが窺われる。

(7) "字義釈" とすることが通例ではあるが、D. 目録に義字評釈、P. 目録には義字釈とあるため、本稿では義字釈とする。

(8) ngan pa ni rgyu ste / yang dag pa'i don la mgo rmongs shing / rgyu ngan pa spyod pa'i phyir ngan pa'o // song ba ni 'bras bu ste / ci'i phyir zhe na / rgyu las dang nyon mongs pas 'bras bu khams gsum du yang nas yang du song ba'i phyir ro //

(9) ngan pa ni rgyu ste nyon mongs pa'o / 'gro ba ni 'bras bu ste / khams gsum dang 'khor

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

ba'i rgyu'o / /

(10) 第二章では釈迦牟尼を中心とする八（九）仏頂マンダラが説かれるが、その中で「悪は三悪趣、趣とは業の習気によってそこに趣いたもの（ngan ni ngan son gsum mo // 'gro ba ni las kyi bag chags kyis der 'gro ba'o //)」(D.192b, P.218a) とし、灌頂を説いた後、「死者を教誡する利益の意味を説かれた」として護摩を説くが、その中で「悪趣の相続に支配される人たちについて仰せられて、悪は習気である。趣とはそれ（習気）に趣くもの、相続とは有情としての相続である。支配される とは業の本質によってそこに生を享けて〔業に〕支配されて、(ngan 'gro'i rgyud dbang du gyur ba rnams kyi zhes gsungs te / ngan pa ni bag chags so // 'gro ba ni der 'gro ba'o // rgyud ni sems can gyi rgyud do // dbang du gyur ba ni las kyi ngo bos der skyes nas dbang du gyur ba ste /)」(D.195a–b, P.231a) と解釈している。

(11) 北村（2000,1–3）には *Tantrārthāvatāra.* における前行、後行の解釈が見られる。

(12) 屍骸（ro）はサンスクリット語では一般的には mṛta、ro sreg pa'i cho ga はśmaśāna vidhi、闍鼻多（jhārita）であるが、ĀG の荼毘儀軌次第（D.No.2632, 2633）では、その経題のサンスクリット語を preta homa と mara homa としている。ツォンカパは、『割註』の中で屍骸に対して ro、phung po 、gshin po の 3 つの語を用いており、屍骸の概念を考える上で興味深い。

(13) 『解深密経』「阿陀那識甚深細」Chi. 大正 No.676.p.692c, Tib.D.No.106. cu.13b7 引用。この箇所は大谷大学・小谷信千代教授にご指摘賜った。

(14) rmongs pa'i rtog pa glo bur bas / kun gzhi'i sgrib pa ni rgyu'o // yang dag pa'i don la mgo rmongs pa'i rtog pa glo bur bas / kun gzhi'i sgrib pa ni rgyu'o // de ci'i phyir zhe na / nang gi nye bar len pa'i phung po 'di len pa'i phyir na / len pa'i rnam par shes pa zab cir phra // zhes pa smos so // ci'i phyir zhe na / ri ni shes pa dang bral bas ltar rgyu dang 'bras bu la mgo rmongs pa'i phyir ro // phyi'i ro ni 'bras bu'i ṇgo bo ste / dbang po lnga'i spyod yul du las dang nyon mongs pas bskyed pas phung po dgos pa can du snang ba'i phyir ro //

(15) sbyin pa ni thugs rjes te bde ba sbyin la / sreg pa ni phrin las rnam pa bzhis bsreg pa'i phyir ro // de la ro'i rgyu ni nang gi sems te / gnyen po 'phags pa'i ye shes rdo rje lta bu'i ting nge 'jin gyis bsregs (D.sreg) la / 'bras bu'i ro ni 'jig rten gyi mes sreg pa'i tha tshig go /

(16) ĀG とプトンの『荼毘儀軌』の真言按上をまとめると以下の表のようになる。

表 8–1: ĀG『儀軌釈』所説の身体真言按上

身体部位		AG 解釈	真言
額		普明	oṃ śodhani śodhani sarva pāpaṃ viśodhani śuddhe visuddhe sarva karmāvaraṇā viśuddhe svāhā
白毫		悪趣清浄〔王〕	oṃ śodhani śodhaya sarvaāpāya viśodhani hūṃ phaṭ hūṃ
耳	右	宝華（宝幢）	oṃ śodhani śodhya sarvaāpāya sarva satve bhayo hūṃ trāṃ
	左	釈迦牟尼	oṃ śodhani bhaya sarvāpāya viśodhani hrīḥ
頂髻		開敷華	oṃ śodhani śodhaya srva satveya trāṭ ā (D.aḥ)
臂	右	根本明呪	namo bhagavati sarvadurgati pariśodhani rājāya tathāgatāya arhate samyakusaṃbuddhāya tad yathā oṃ śodhani śodhani sarva pāpaṃ viśodhani saddhe viśuddhe sarvakarmāvaraṇā viśodhani svāhā
	左	金剛菩薩	oṃ sarvāvaraṇā viśodhani hana hūṃ phaṭ
鼻		王	oṃ sarvavid hūṃ
腰		愛	oṃ sarvavid (P. のみ hrī) phaṭ
膝	右	喜	oṃ sarvavid āḥ
	左	宝	oṃ sarvavid trāṭ
足背	右	光	oṃ sarvavid oṃ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

	左	幢	oṃ sarvavid sva
踝骨	右	笑	oṃ sarvavid āḥ (P.a)
	左	法	oṃ sarvavid hūṃ
眼	右	文殊(利)	oṃ sarvavid trāṭha (P. とブトンは traṭ)
	左	因	oṃ kṣa
秘処		語	oṃ bha (P.vā)

D.No.2626. chu.57b3–5

表 8–2: ĀG『死屍護摩儀軌 a』所説の身体真言按上

部位	真言
胸	oṃ sarvavid vajrāvaraṇā viśodhaya hana hūṃphaṭ
両眼	oṃ sarvavid hūṃ
両耳	oṃ sarvavid hri
鼻先	oṃ sarvavid aḥ
顎（顔）	oṃ sarvavid traṭ
額	oṃ sarvavid oṃ
頭頂	oṃ sarvavid hūṃ
両臂	oṃ sarvavid sva
両肘	oṃ sarvavid oṃ
両踝	oṃ sarvavid traṭ
秘処	oṃ sarvavid phaṭ
腰	oṃ sarvavid oṃ
頭蓋	oṃ vajra adhiṣṭāna samaya hūṃ
両腋下	oṃ vairocana oṃ
両大腿	oṃ sarva durgati pariśodhani hūṃ
両小腿	oṃ ratna hetu traṃ
両膝	oṃ śākyamune a
両脚	oṃ traṭ āgaccha

D.No.2632. ju.158b7–159a3

表 8–3: Bu ston『荼毘儀軌』所説の身体真言按上

部位		真言
額の眉間		oṃ śodhane …viśuddhe svāhā
耳	右	sarva satvebhyaḥ hūṃ
	左	hūṃ phaṭ
頭頂		oṃ traṭ
両臂		hūṃ
鼻		hūṃ phaṭ
腰		hūṃ
膝	右	phaṭ
	左	aḥ
鼻先		hūṃ
眼	右	traṭ
	左	oṃ śa
秘処		oṃ bha

5a3–6

(17) D.rig pa'i, P.rigs pa'i とあり、D. を採った。

(18) D. には BRUṂとあるも P. を採った。

(19) 非時死による恐怖の対治を目的とする摧壊死魔無量寿マンダラも説かれる（経軌 D.82b–87a, P.78b–83b)。

(20) この経軌の註釈者の一人である Kāmadhenu は荼毘護摩よりも、むしろ四種護摩に重きを置き、『大日経』世出世護摩法品のほとんどと、『蘇悉地経』、『幻化網タントラ』を引用し解釈に当てている。拙論（2003b）参照。

謝辞

本論をまとめるにあたり、大谷大学・小谷信千代教授、ツルティム・ケサン教授、種智院大学・北村大道教授にご指導賜った。末筆ながら感謝申し上げる次第である。

NII-Electronic Library Service